

児島常山城 その歴史と保護

城兵と女軍たちの慰霊
観光開発と史跡の保護
いま迫る、城跡の荒廃

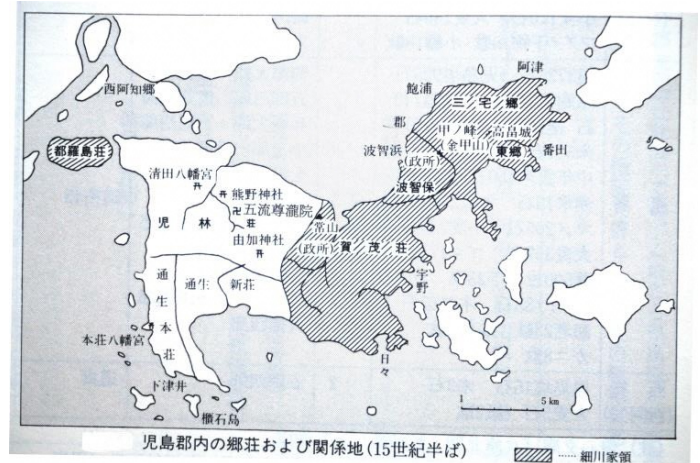
主催：玉野市教育委員会・玉野市文化財保護委員会
期間：平成30年9月15日～平成31年3月31日

玉野市の北西部と岡山市南区・旧灘崎町との境に、標高307.2mの常山があります。ここには戦国初期から江戸時代初頭まで続いた連郭式山城という形式を持つ常山城がありました。天正3年（1575）の「常山合戦」で女軍の戦いが有名である常山城は、昭和39年（1964）に市の史跡に指定されました。しかし、平成23年（2011）9月の台風豪雨によって起った登山道の再崩落により自動車での通行ができなくなり、城跡の荒廃は深刻化しています。今回の展示ではこの常山城をとりあげ、築城前、上野氏時代、戸川氏時代、近現代の保護顕彰活動の四時期に分けて、常山城の歴史と保護について紹介します。

1. 常山築城前

右の図は15世紀半ばに児島郡の中にあった荘園などを示しています。斜線を施した地域は阿波国守護細川氏の支配地だった部分で、玉野市の全域が含まれています。ここに細川氏の重臣だった飯尾氏という一族が代官として派遣されて来ます。

その着任した地が現在の用吉の天神宮のある一帯といわれ、木目には飯尾氏の古い墓石も残っています。さらに、滝の早瀬比咩神社には、文安2年（1445）に飯尾真覚という代官が奉納した懸仏基板も伝わっています。しかし、この時期には常山城はまだ築城されてはいなかったと思われます。



用吉・岡田の天神宮と常山



木目・向谷の飯尾氏古墓



飯尾真覚寄進の懸仏基板

2. 上野氏時代と常山合戦

常山城を最初に築いたのは上野氏です。もともと上野氏は、備中国下道郡（総社市西部）付近を拠点としていましたが、文明18年（1486）、同国窪屋郡幸山城（旧清音・山手村境）の石川氏と合戦して敗北し、延徳2年（1490）、備前国児島郡の熊野社領に侵入し、社領を奪ったことが知られています。その中心は上野土佐守と上野肥前守で、この頃、常山城が築かれたと思われます。上野土佐守は文亀3年（1503）に隼島荘（現早島町）の代官を務めている記録があり、早島に移ったのでしょう。

この初代肥前守の孫と思われるのが上野肥前守隆徳です。倉敷市児島通生の般若院には、隆徳夫妻の記録が伝えられています。その天文23年（1554）の記録には、夫人の名は「鶴姫」、18・9歳とあります。当時、毛利氏に属して強力となったのが備中国成羽・鶴首城主三村家親で、鶴姫はその長女でした。家親は永禄4年（1561）頃に備中松山城（現高梁市）を奪い、ここに移って備中国をほぼ統一します。隆徳も、児島郡の東端と日比・玉などを除くほぼ全域を支配するようになります。

しかし、三村家親は永禄9年（1566）2月、宇喜多直家の刺客によって暗殺されます。跡を継いだ三村元親は、翌年7月大挙して備前平野に侵入しますが、大敗します（明禅寺合戦）。天正元年（1573）、主家毛利氏と宇喜多氏の和平成立に反発した元親は、翌年8月、織田信長からの誘いを受けて毛利離反を決意します。こうして、三村氏の滅亡する「天正備中兵乱」、最後に元親に同調した上野隆徳一族が滅亡する「常山合戦」が起ることになります。

天正備中兵乱と常山合戦関係図



黒字…三村・上野氏側
赤字…毛利軍
青字…毛利支持

倉敷市真備町市場・報恩寺



玉野市用吉・久昌寺



倉敷市児島通生・般若院



常山合戦の戦況を記した古文書（戦国時代）の写し。右側には「常山合戦」とあり、左側には「上野氏」とあり、戦況が記されている。戦況は、上野氏と三村氏との戦いであり、上野氏が勝利したと記されている。戦況は、上野氏と三村氏との戦いであり、上野氏が勝利したと記されている。

「寂弁中興開基 通生山血脉」に見える鶴姫の名（後ろから4行目に「御内證鶴姫様ヨリ御寄進也」とあります。般若院蔵）

天正2年11月に始まった備中兵乱は、翌天正3年（1575）5月22日の備中松山城の落城と6月2日の元親自刃で終りを告げ、あとは児島常山城を残すのみとなります。児島郡内では、同年2月に木見村の木村喜八が常山方について村内に籠城し、3月には毛利＝熊野社方についた同村内の北村小二郎を討ち捕るという戦闘も起っています（下と次頁の二通）。5月には隆徳夫妻の帰依する通生・般若院が毛利の影響を受けて焼亡します。

『常山軍記』には、6月4日毛利勢が常山の麓の村々に陣して完全に包囲したとあります。総攻撃は6日朝から始まり、城方の頑強な抵抗を受けて一端退きます。翌朝、城方は一族自刃を敵方に告げ、最期の酒宴の後、隆徳の継母、嫡男、次男、妹と次々に死に、鶴姫は侍女34人とともに敵方に切り込み、常山女軍の名を残し、城に戻って自害します。隆徳は弟高重の介錯で切腹し、弟も果てます。こうして上野氏は滅亡しました。しかし、隆徳の長女や末娘は生き延び、その子孫が迫川の上野氏、大崎池の内長谷井氏、旧真備町岡田の三宅氏などになっていきます。

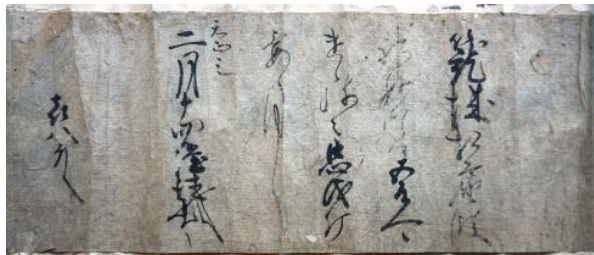
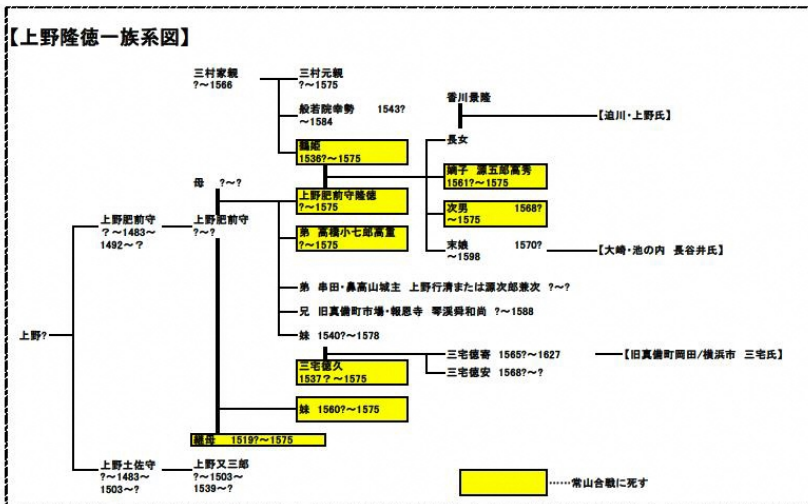
前頁に写真を掲げた倉敷市真備町・報恩寺には、上野隆徳守り本尊と伝えられる紙本阿弥陀如来像（右下）が、また、玉野市用吉・久昌寺には上野隆徳持仏という薬師如来坐像（右）があります。常山合戦前後に秘蔵秘仏とされ、滅亡した上野氏の菩提を弔うために大切に守られてきました。今回の展示で、木村家蔵の上野隆徳自筆感状とともに、443年目に一堂に会することになりました。



久昌寺・薬師如来坐像
（自由に拝観できます）

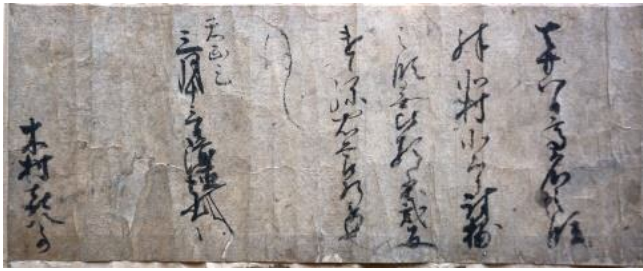


報恩寺・紙本阿弥陀如来像
（岡山県立博物館寄託）



籠城相届段
神妙 □ □ 五反可
遣候弥々忠儀肝
要候 謹言
天正三
二月十四日隆徳
喜八殿 (花押)

倉敷市木見・木村家蔵
隆徳感状二通



去廿八日高名之段
殊北村小太郎討捕
之段無比類条式反
遣候弥忠節肝要也
謹言
天正三
三月十三日隆徳
(花押)
木村喜八との

3. 戸川氏時代と常山廢城

毛利氏時代

天正3年(1575)6月、常山合戦は終わり、常山城は毛利氏が占領します。毛利氏は家臣を城番に派遣して管理します。今その可能性が知られている城番には次のような人々があります。

- | | |
|----------------|-------------|
| ①山本四郎左衛門 | 時期不明 |
| ②冷泉民部少輔元満 | 天正4(1576)3月 |
| ③明石兵部大輔 | 同 5 5月 |
| ④渡辺房(出雲、伊豆か摂津) | 同 8 2月 |
| ⑤湯浅治部大輔将宗 | 同 10 2月 |

従来、常山合戦後の天正4年から宇喜多氏が常山城を支配したとされてきましたが(永山卯三郎著『岡山縣通史』)、合戦後、一貫して毛利の支配下だったと考えられます。

毛利・宇喜多の争い



宇野市大崎・与太郎神社
宇喜多基家墓

信長は羽柴秀吉を中国地方に派遣して、全国統一を進めます。毛利氏と手を組んでいた宇喜多氏も、天正7年(1579)ころから織田氏に寝返り、天正10年(1582)4月には両軍が激突する「備中高松城の戦い」が始まります。それに先立つ同年2月には、大崎・麦飯山城に進出した毛利勢と、秀吉の支援のもと八浜の両児山城に陣を敷いた宇喜多勢との間で「八浜合戦」が起ります。この戦いで宇喜多与太郎基家が討死しますが、決着はつかず、決戦は備中高松城の地に移っていきます。

秀吉は梅雨の増水を利用して水攻めを行い、戦いは長期戦となります。しかし、6月2日、本能寺の変が起き、秀吉は毛利方と急遽和睦し、城主清水宗治の切腹を見届けて姫路方面に引き返します。その後、山崎の合戦で明智光秀を破り、賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を降ろし、信長の後継者の地位を獲得します。天正13年(1585)3月、秀吉は毛利氏と所領の線引きを行い、この時、児島郡全域と常山城は宇喜多氏の支配下に入ります。

富川氏時代

この時、常山城主になったのが宇喜多氏の重臣富川(のちに戸川)平右衛門です。天正14年には従五位下肥後守に叙任され、秀安と名乗ります(『戸川記』)。同18年(1590)には、病気のため嫡男助七郎に城主を譲ります。助七郎は従五位下肥後守を継ぎ、達安と名乗ります。この富川氏二代にわたる常山城主時代は、慶長4年(1599)の宇喜多騒動によって達安が主家を退去するまでの約15年間続きます。

この間、秀安は常山東麓の宇藤木を拠点に児島郡の支配を進め、郡内各地の城砦を整理し、自ら信仰する日蓮宗を保護拡大させていきます。隠居前年の天正17年には宇藤木に「常山充徳寺」を建立し、出家した家臣らと題目三昧の生活を始め、隠居後「友林」と号します。慶長2年(1597)9月6日に60歳で没し、常山東麓に葬られました。現在、「友林堂」の上段に戸川友林の五輪墓があります。

一方、達安は、初め児島郡内で7,530石、最終的には備中・美作を含めて25,600石を給され、宇喜多秀家の執政を務めます。秀吉の朝鮮出兵には主君とともに出陣し、苦しい戦いを経験します。また、不在がらの常山城を補強し、現在山頂に残る14の曲輪や石垣、土塁跡、さらに散乱する瓦片などは、この富川氏時代に由来するものと考えられます。



戸川友林墓（市指定重文）



常山充徳寺の古板
天正17年（1589）在銘



軒丸瓦
大野公平氏寄贈

惣門丸・
備前焼片



本丸・軒平瓦片
（岡山城と同範）

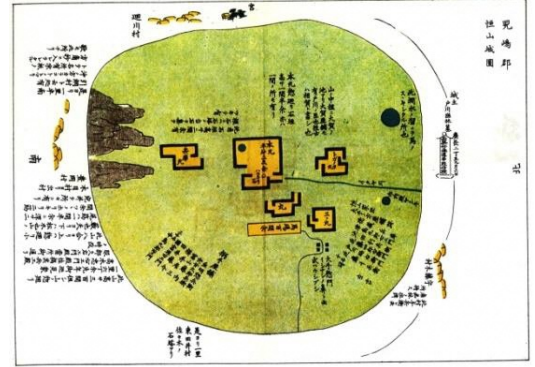


廃城

慶長4年、主家を退去した達安（戸川と改姓）は、翌5年（1600）の関ヶ原合戦で徳川方につき、合戦後、家康から備中庭瀬29,000石を賜ります。常山城には、備作57万石余で岡山城主になった小早川秀秋の重臣伊岐遠江守真利が入城します。真利は、槌ヶ原・田井村など児島郡内7ヶ村合計4,800石余など16,800石余を給されます。しかし、主君秀秋が同7年10月死去、無継廃絶となり、真利も紀州（和歌山県）に去り

（『玉野市史統編』267頁）、常山城は再び主を失いました。

ついで慶長8年（1603）2月、姫路城主池田輝政の次男忠継が備前28万石で岡山城主となりますが、常山城には池田家の家臣が入ることなく、廃城と決しました。やがて、下津井城の大修理のため常山城の建物が移築再利用され、修理の完成する同11年ころには常山城は完全に姿を消したと考えられます。こうして、常山城は、戦国初期から近世初頭の廃城までの約100年間ほど存在したことになります。



『吉備群書集成』（一）（1921.1刊）に収録された「児島郡常山城古図」。延宝9年（1681）頃の図と推定され、廃城約80年後の常山城の状態を示しています。

友林堂建立

JR常山駅横の道を常山方向へ150mほど登ったところに、常山城主戸川友林を祀った「友林堂」があります。その一段上には友林の五輪墓が立っています。本来は、友林開基の「充徳寺」（寺跡未確認）に友林墓もあったようですが、いつしか廃寺となり、五輪墓も現在地に移されました。友林の位牌や遺品は、宇藤木村に住む与兵衛という人物に管理を委ねられ、戸川家から毎年下米が支給されました。

この人の子孫の嘉左衛門（則武氏のち大塚氏と改姓）の時に、位牌を祀る部屋の増築を戸川家に願い出て、安永10年（1781）、戸川4家から合計銀810匁（約10両に相当）が下賜されました。しかし、家内に病人が出るなど不幸が続き、同じ住まいの中で位牌を祀っているためと考えた嘉左衛門は、自宅とは別に靈廟を建てるよう歎願し、文化2年（1805）9月、戸川4家や家臣・領民の拠金により友林の「御霊屋」が創建されました。これが現在の「友林堂」です。その後、大小の改修を重ねながら、戸川家の子孫と地元宇藤木の人たち、そして何よりも墓守を務めてきた代々の大塚家の人々によって大切に守り続けられています。



友林堂（市指定重文）と内部の極彩色の天井絵



4.常山城の保護と顕彰に尽力した人々

大野幸太郎氏



慶応元年(1865)8月7日、児島郡宇藤木村で織物染色業を営む大野伝造の長男に生まれる。22歳から公職に就く。おもなものは、同20年9月用吉外三ヶ村役場用掛、同22年9月下加茂村収入役(～36年6月)、同36年8月荘内村々会議員(～昭和5年7月)、同39年9月児島郡々会議員(～大正7年9月)、昭和5年7月荘内村々長(～昭和8年11月)など。

明治28年(1895)父の死去後、家業を受け継いで発展させ、同34年、荘内や灘崎の同業者で「備前小倉精品組合」結成、同38年には「岡山県児島郡織物同業組合」に発展、さらに「備前織物同業組合」と改称、同年8月に同組合の組合長に就任。大正2年10月、染色技術を高めるため組合内に「染色研究会」を設置、同3年、迫川に「染織研究所」を設立して所長となる(～同7年5月)。

常山城址保勝会の活動

大正10年(1921)6月、常山城址保勝会趣意書をまとめ、同年7月には、会長岡山県知事と児島郡長、自身は副会長となって会を設立。昭和8年(1933)2月には保勝会会長に就任する。おもな事業は、

- 登山道(通称螺旋道)建設(大正10.10着工、同11.4竣工)
- カラーポスター「常山城趾公園」(同11.7発行)
- 梅尾丸に「常山閣」建築(同12.5落成)、山頂一帯や二合目に桜などを植樹し、展望台・休憩所・茶店等を建設。
- 常山二合目に「常山寺」建立(同15.2落成、真言宗、昭和11年に日蓮宗寺院に改宗)。
- 常山女軍の墓と石碑の建立(昭和12.5落成)

昭和18年、逓信省が常山山頂に軍用の無線中継所を建設、一般人の立入禁止。戦後直後GHQがこれらを接收して立入できず。昭和22(1947)8月22日没、83歳。



大野幸太郎が大正11年7月に編集発行したもので、ほぼ完成した常山公園の姿を描いている。植樹された桜があちこちで咲き乱れ、宇野線にはSL列車が通り、登山道には徒歩や自転車、人力車、自動車で頂上をめざす多くの人々、山頂の施設や二合目にテニスコートなどが見える。観光客・登山客向けのカラーポスターである

荘内観光協会

大野幸太郎氏の死後、保勝会は活動を停止し、常山閣は昭和23年に解体され、宇藤木公会堂、荘内公民館に転用された。翌24年には常山寺も岡山市の蓮昌寺に移された。同31年に保勝会の活動は荘内観光協会として再開された。本丸跡に天守閣を建設する計画もあったが実現せず、同33年に鉄筋コンクリート三階建ての展望台が建設された。山頂に売店もあった。昭和50年まで活動を続けた。

大野公平氏



昭和2年(1927)3月28日、大野幸太郎氏の次男に生まれる。昭和20年3月、岡山県岡山第一商業学校(現岡山県立岡山東商業高等学校)卒業後、逓信省常山統制無線中継所に奉職。同22年父が死去し、兄が早く亡くなっていたため家を継ぐ。同27年設立の日本電信電話公社を経て、常山無線中継所の無人化を受けて同60年3月定年退職する。

常山観光協会の活動

昭和47年から常山山頂で常山女軍の供養祭を始めたと記録されているが、昭和12年以來の「常山女軍の唄」と「常山落城記」をもととした地踊りを奉納する供養祭は、同49年8月15日が始まりのようである。翌50年に大野公平氏を会長とする常山観光協会が発足、翌51年4月10日には、女軍の墓前で常山落城四百年祭が営まれ、記念碑の除幕式が行われた。同60年からは、常山無線中継所の無人化のため、電信電話公社が行っていた登山道等の草刈・清掃・落石倒木整理等を観光協会が引受けた。

しかし、平成16年と23年(2011)の二度にわたり、豪雨により千人岩下手の登山道が大規模に崩落し、山頂への自動車通行が不可能となった。常山女軍の供養祭の頂上開催をはじめ、委託された草刈や側溝の清掃管理が困難となった。山頂の諸施設や城趾の荒廃が深刻化する中、公平氏は病を押してNTTや国交省・県市と掛け合い、同29年8月の二合目での供養祭で、玉野市長から登山道再開の約束をもらう。しかし、念願の登山道再開を見届けることなく、同年12月5日亡くなる。満90歳であった。



第24回常山女軍供養祭 平成9.8.3



常山女軍供養祭の始まり (山陽新聞 昭和49.8.17付)

常山落成四百年記念碑除幕式 昭和51.4.10

桜守 大野明氏

大正10年(1921)以降、常山山頂や二合目には常山城址保勝会や常山観光協会によって数々の樹木が植樹されてきた。それらを維持管理されていたのは、国鉄マン出身で観光協会の一員でもあった大野明氏である。

氏は山頂付近の竹木を伐採し、石垣の間から生える雑木を剪定して、城郭の保護に当たるほか、杉やもみじ、桜などの古木・若木を管理して樹勢を守る樹木医的な活動を続けてこられた。人々からは、常山の「桜守」と呼ばれた。

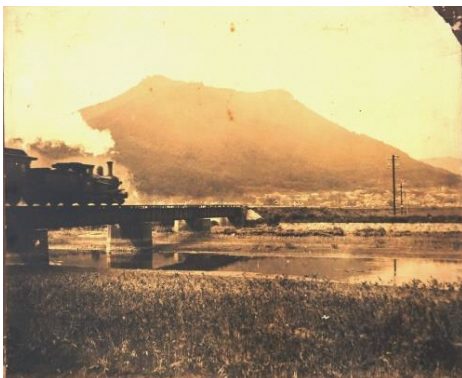


しかし、氏は平成13年(2001)3月、病気で亡くなられる。氏が特に大事にされていたJR常山駅の桜並木は、氏が亡くなったすぐあとの4月初め、氏に感謝するかのように美しく咲き誇った(平成13.4.8撮影)。

5. 衝立展示のパネル写真一覧

(主なものは写真掲載 大野彰一氏蔵は★印 新聞記事は◎)

1 大正末年 宇野線鴨川鉄橋と常山 ★



2 平成30.7 JR宇野線鴨川鉄橋と常山



3 明治38.8 常山の国有林伐採による城跡遺構の再確認

4 大正10.8 常山城址保勝会 趣意書・規則書・図面 ★

5 大正11.3頃 荘内村青年団による登山道の開鑿作業 ★



6 大正11.3 工兵隊と荘内村青年団員の登山道開鑿 ◎

7 大正11.4 常山公園賑わう 近く登山道竣工予定 ◎

8 大正11.5 常山公園近況望遠台・仮講堂など完成 ◎

9 大正12.5 常山公園講堂落成式を挙行 ◎

10 大正12.5 常山公園講堂落成式の稚児行列 (大野敬一氏蔵)



11 大正15.2 常山二合目の常山寺入仏式 ★



12 昭和5頃 常山山頂の諸施設 ★



13 昭和12.4 常山女軍の建碑急ぐ ★◎

14 昭和12.5 常山女軍墓碑除幕式執行 ◎

15 同年月日 常山女軍墓碑除幕式多久岡山県知事の祭文 ★



16 同上 常山女軍墓碑閉式後の記念撮影 ★

戦後の動き

17 戦後の常山城天守閣復元計画

18 昭和49.8 常山女軍供養祭始まる ◎ 6頁掲載

19 昭和51.4 落城400年記念碑除幕式行われる 6頁掲載



登山道崩落現場



登山道を覆う土砂や落葉



本丸 もみじの古木倒れる



屋根が壊れた底無井戸

20 平成20.8 螺旋道復旧、供養祭4年ぶりに復活 ◎

21 平成23.9 螺旋道再度崩落、復旧工事行われず、城跡の荒廃深刻化 (平成27.1.24撮影 左4枚)

22 平成29.8 黒田市長、供養祭で登山道の年度末までの復旧を約束 ◎

23 平成30.8 登山道の崩落現場復旧できず、二合目での供養祭となる



平成30.8.11供養祭